

1. はじめに

平安期の名作には、清少納言の日本初のエッセイ枕草子がある。思ったことを記述すといった現代人には親しみやすいとあって、今日にも読み継がれている。ここでは枕草子論として、今日的視点も入れながら、作者の思いがどう表現されているのか、当時の社会の様相とともに述べたい。ただし、論評に際しては枕草子に関するいくつかの評論を参考にした。

2. 清少納言について

枕草子がなぜ書かれたかについては、まずは作者清少納言がどんな職場環境で仕事をしていたかを明らかにしておかねばならない。以下に述べる。

<1>人物

まずは、名前から。清少納言は、清原家の少納言という役職の家柄をそのまま文学女史の名前になったという。当時は女性に名前をつけはしたが、記録に残すことはなかったためであるので、後世に名を冠らせたという。

<2>宮使い

貴族の出であるから宮中への宮使いが当時の花の職業であったことであろう。清少納言が使っていたのは定子中宮(以後定子)であり、定子はいまでいうレベルの高い知的サロンを催し、女官と共に供与を磨いていたといわれている。なお、ライバルである紫式部とは、清少納言が宮中を去った後、5年後に紫式部が彰子中宮につかえるために宮中に入ったので、両者には面識はなかったという。

<3>枕草子の執筆へ

研究者によれば、定子の知的サロンで知の楽しさを満喫していた清少納言が定子にかわいがられており、何時しか定子を喜ばそうと思ひ立ち、また定子からも執筆活動の道を用意されたのではという。

3. 枕草子の構成

<1>全体構成

枕草子については；定子をほめること、定子のすばらしさを記述すること、定子が清少納言の能力の発掘したこと、が背景となっている。(上節にも記したとおり)

枕草子の内容は、「宮中での出来事を記した日記」、「かわいらしいものなどに着目したテーマ」、「自然や人間に関してのエッセイ」、この3点が挙げられる。研究者によれば、この3点は実は共通して、定子のためのものという。言われてみれば、定子のサロンをもとに繰り広げられた文学世界の一翼を担うとして、日々の生活、周辺環境に着目したといってもよいようである。

まお、定子没落後においても、清少納言は枕草子にて定子のやさしさを記している。この点が、紫式部には気に食わなかったようである。

<2>文の構造

清少納言の執筆にあたり、深い目的は文の構成に現れていると研究者は指摘している。

a.使用する言葉

形容詞の多用；おかし、愛でたし、めでたし、かしこし、など

注；めでたしとは最高の誉め言葉。例は 中宮様の着物はめでたし

b.女性たちの心情表現；ポジティブが多い中で、あさまし、にくしのネガティブ表現もある。

白黒明確にする気質；

和歌を使つてのコミュニケーション

c.感嘆(おかし)の文学；知識や教養を日常生活でうまく使っている。

d.センス；語彙が豊富でありセンス抜群

春といえば一般には桜や梅をさすが、枕草子では「あけぼの」とするいいセンスだ。

ただし、春はあけぼのは定子のことのようだとの研究談。

4. 批評・評価

<1>ライバル紫式部による事情(平安期批評)

平安期、二大作品は世に出回り、両者お互いに作品を互いに作品を読んでいて意識していたのは当然である。

式部日記では、式部は清少納言をこっぴどく批判している。源氏物語では、女性の生き方を問題にしたのに対して、枕草子は単に日常の事を扱ったに過ぎない、といった捉え方であったのでないか。特に、定子のつらさに触れられていないからウソっぽいともいっている。

これに対し、清少納言は源氏物語を批評したということはない。どちらかと言えば、清少納言はマイペースで日常をおもしろくと捉えていたのと、定子の失脚で悔しさといった感情を定子をおもんばかってあらわにできなかったのであろう。

そこで思う。清少納言の思いを考えると、紫式部は何やら嫉妬していたのではないのか。

5. まとめにかえて、枕草子の今日への影響

枕草子はさすがに日本初のエッセイと言われるだけに、何か自由奔放に風景や人間模様を文章化している。言葉は人間行動地リンクしてるだけに、そこに文字の世界を入れることこそ、実際の役目があったともいえる。こうしたことが、清少納言を先人として、後世に道を開いたといえ、ここに行動、言葉、文章がリンクしたということができる。

A. 付録；平安期の女性のお召し物

十二単については、重ね色の組み合わせで色彩のグラデーションが美しい。この十二単は12枚の重ね着ではなく9枚ほどとのことである。着着には従者の助けを借りて30分ほどかかる。もともと、十二単は10-20kgある。今でも京都加茂賀も社では着付けのデモが行われており、従者2名による着付ショーが楽しめる